

# 営農再開後における水田害虫発生の実態

福島県農業総合センター 浜地域農業再生研究センター

事業名 福島県営農再開支援事業  
小事業名 営農再開に向けた作付・飼養実証  
研究課題名 除染後農地における水稲病害虫の課題  
担当者 三本菅猛、根本知明、松木伸浩

## I 新技術の解説

### 1 要旨

営農再開地域では、農地除染や営農中断による農業生産を取り巻く生物相の変化など環境への影響が懸念されている。そこで、農地除染後に水稲作付けを再開し、慣行防除を行ったほ場で水田害虫の発生状況を複数年にわたり調査したところ、斑点米カメムシ類は、一部のほ場で再開直後に発生が多かったが、徐々に発生が少なくなった。水田害虫に対しては、農地除染方法、水稲作付再開後の年数、栽培方法によらず、慣行防除で対応できることが明らかとなった。

- (1) ほ場条件（平坦部や中山間部、農地除染方法、水稲作付再開後の年数）及び栽培方法が異なるほ場で、斑点米カメムシ類及び水田害虫について、複数年調査した（表1）。
- (2) 斑点米カメムシ類は、防除の目安（2~4頭）以上のほ場及び年次があったものの、農地除染方法、水稲作付再開後の年数、栽培方法によらず、慣行防除で防除可能な水準であった（図1）。
- (3) その他の水田害虫では、標高の高いほ場で、イネヒメハモグリバエやイネミズゾウムシの発生が見られたが、慣行防除で防除可能な水準であった（図2）。

### 2 期待される効果

- (1) 営農再開地域の水稲栽培の再開に際し参考となる。

### 3 活用上の留意点

- (1) 一部のほ場で病害虫の発生が見られたものの、水稲への被害は少なく、慣行防除で栽培可能だった。
- (2) 福島県病害虫防除所の発生予察調査（浜通り）では、調査期間を通して平年と比べ、斑点米カメムシ類がやや多く、イネヒメハモグリバエ、イネドロオイムシが少なく、イネミズゾウムシが2019年で多かった。

## II 具体的データ等

表1 ほ場条件と栽培方法

調査ほ場 (標高:m)	農地除染	品種(上段)及び水稲作付再開後の年数(下段)				栽培方法	防除
		2016年	2017年	2018年	2019年		
飯舘村八和木 (460)	表土剥ぎ+客土 (2015年)	天のつぶ 1年目	ひとめぼれ 2年目	ひとめぼれ 3年目	天のつぶ 4年目	移植	慣行
飯舘村須萱 (520)	表土剥ぎ+客土 (2015年)	こがねもち 1年目	里山のつぶ 2年目	里山のつぶ 3年目	ヒメノモチ 4年目	直播	慣行
南相馬市小高区金谷 (50)	表土剥ぎ+客土 (2017年)	-	天のつぶ 1年目	ひとめぼれ 2年目	天のつぶ 3年目	直播	慣行
南相馬市小高区上浦 (9)	深耕 (2015年)	-	天のつぶ 1年目	-	-	移植	慣行

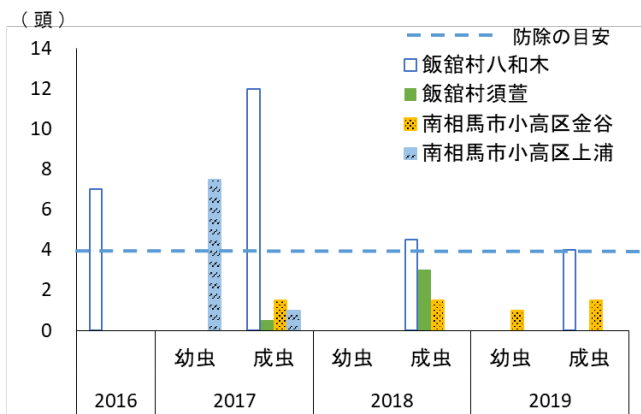


図1 斑点米カメムシ類の発生経過

注1) 20回振り2か所のすくい取り虫数の平均値  
 甚: 31頭以上、多: 11~30頭、  
 中: 4~10頭、少: 1~3頭  
 注2) 各年8月の調査の結果

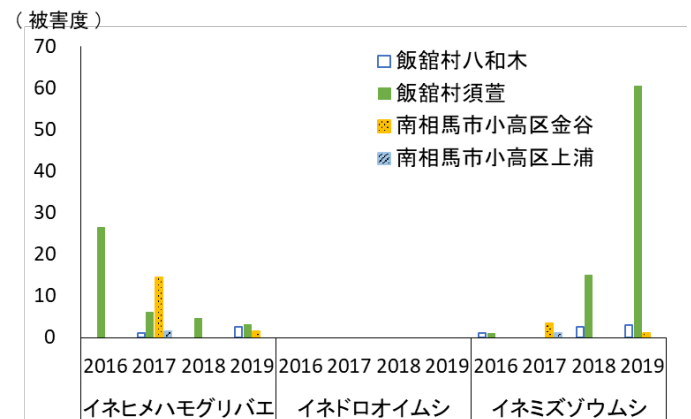


図2 水田害虫の発生経過

注1) 被害度は、25株2か所調査結果  
 $(4A + 3B + 2C + D) / 4 \times \text{調査株数} \times 100$   
 イネヒメハモグリバエ、イネドロオイムシ  
 は、被害葉率 A: 51%以上、B: 31~50%、  
 C: 16~30%、D: 1~15%、  
 イネミズゾウムシは、被害葉率 A: 91%以上、  
 B: 61~90%、C: 31~60%、D: 1~30%  
 注2) 各年6月下旬の調査結果

## III その他

### 1 執筆者

三本菅猛、根本知明

### 2 実施期間

令和元年度

### 3 主な参考文献・資料

なし